銀婚式決算報告

男性自身シリーズ

山口瞳

銀婚式決算報告

男性自身シリーズ

山口 瞳

新潮社

銀婚式決算報告（ぎんこんしきけっさんほうこく）■男性自身シリーズ11

昭和五十年九月五日印刷　昭和五十年九月十日発行

■定価六八〇円

© Hitomi Yamaguchi, Printed in Japan, 1975.

著　者――山口瞳（やまぐちひとみ）
発行者――佐藤亮一
発行所――株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一　郵便番号＊一六二
電話＊業務部　東京（〇三）二六六―五一一一
編集部　東京（〇三）二六六―五四一一
振替＊東京四―六〇八
印刷所――株式会社金羊社　製本所――新宿加藤製本株式会社

＊乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

*目次***

超能力 9
身のほど知らず 14
東京の食物 19
ある弁明 24
私の肩書 29
広島 35
五月二十六日のこと 40
銀婚式決算報告 45
齲歯の日 51
必殺鉄火場戦法(一) 56
必殺鉄火場戦法(二) 61
必殺鉄火場戦法(三) 66
必殺鉄火場戦法(四) 71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

老婆心 76
人生五十年 81
名人就位式 87
女嫌い(一) 92
女嫌い(二) 97
床屋政談 102
床屋球談 107
人間の生命 112
うちの梅干 117
自然 122
どうしていいか 127
湖 132
勝負の世界 137

長島茂雄 142
秋晴れ 147
英雄の死 152
秋雨 157
十一月三日 162
電気 167
労働組合 172
馬鹿な考え 177
寒い 182
今年 187
蕎麦屋の酒 192
葱鮪鍋 197
母のブレンド 202

こわい夢 207
扇子の効用 212
正月の子供 217
この実相 222
一種の不安 227
オバケ 232
理想の庭 237
今年の雪 242
釈然とせず 247
奇怪な行動 252
大関貴ノ花 257
水彩画 262
桜見物 267
今週のショック 272

装幀
カット　柳原良平

銀婚式決算報告

男性自身シリーズ11

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

超能力

四月一日、『小説現代』誌の新人賞の選考委員会があり、そのあと、野坂昭如さんと一緒に「野良犬の会」の会場へ行った。私は会員ではないのだけれど、案内をうけていた。ひとつには『噂』という雑誌の会合と勘違いしているようなところがあり、ひとつには梶山季之さんに会いたいという気持があった。『噂』と間違えたのは、私の留守中に『噂』の編集長のTさんからぜひ出席するようにという連絡があったのを女房から聞いたためでもあった。

私たちが四谷の鳥料理屋の二階座敷に到着したのは八時過ぎであった。そこにいた人の名を上座のほうからあげてゆくと、今東光、柴田錬三郎、沢村三木男、黒岩重吾、戸川昌子、吉行淳之介、田中小実昌、梶山季之、藤本義一、長部日出雄、井上ひさし、野坂昭如、桶口進、それに私ということになる。さながら中間雑誌の目次を見るようで、私のようにその世界にいる者でも変な気分になる。

これは『噂』に関係の深い人たちで、『噂』の会だと言ってもおかしくはない。また当夜は、今東光さんの全快祝いであって、今さんはガンを投げとばして退院してきたということで、非常にお元気であり、私には、そもそもそれが超能力であるように見うけられた。肝腎の梶山季之さんは、すでにレロレロであって、今日高知から帰ってきて明日また高知へ行くのだと言うかと思うと、私が彼の作品であるところのサトイモを褒めると、うん、明日は伊豆へ行って畠仕事だとわめく始末であった。

私たちが到着する以前に、超能力の関口淳少年を呼ぶことがきまっていた。柴田さんが信者で、黒岩さんがその同調者であるように見うけられた。

私はそういうことを全く信ずることの出来ない質の男である。野坂さん、長部さん、井上さんも同類であるようだ。吉行さん、戸川さんにはそのことを面白がってしまうような気配が感ぜられた。

やがて、淳少年がやってくると、梶山さんは、キミ、ちいさいのにかわいそうだねえ、こんなに遅くまで働かせられてと言い、これは少年の感情を著しく害したようだった。

私が、こういうものを信じないのは、多くの人もそう思うだろうけれど、なぜスプーンを曲げることしか出来ないのかということと、なぜ人類の進歩に裨益するような能力を発揮できないのかという二点にどうしてもひっかかってしまうからである。これでは、喜ぶのはスプーン製造会社だけである。

淳少年の実験は別の座敷で行われた。彼は、これでは人数が多過ぎると言う。また、横から見ないでくれと言う。あるいは、このなかに信じていない人がいるのでやりにくいという。さらに、頭が痛いとも言う。そう言いながら、スプーンをもてあそび、ズボンの尻

のポケットに突っこんだりする。

私はこういうものを信じていないうえに、それを見るのも嫌いなほうなので、もとの部屋に帰ってきた。野坂さん、長部さん、井上さんも帰ってきた。

別室から笑い声がきこえてくる。これだけの人たちを笑わせるのは、たいした芸人だと思った。それが一時間ばかり続いたあとで、みんなが戻ってきた。たしかにスプーンは曲ったという。それを見せてくれた。しかし、どうも、みんなの視線を逃れた瞬間にスプーンを曲げるようなところがあり、信ずる派と信じない派の争いは引きわけということになった。

こんどは廊下でやってみるという。そこで、私ほか四、五人の人が席を立ったが、どうしても私のいる間はスプーンを投げようとしなかった。少年は、やはり、信じていない人がいるから厭だと言う。私が席に戻ったあと、スプーンを曲げてみせたそうだ。

誰かが、スプーンを磁石にして、別のスプーンを吸い寄せたとも言った。そのとき、私は、そんなことぐらい自分でも出来るような気がして、持っていたスプーンを別のスプーンに近づけると、すでに磁力が生じていて、別のスプーンを自由に動かすことが出来た。それを見て驚いた人もいた。擦っていれば磁力が生ずると私は考えている。

翌日の正午に、黒岩重吾さんから電話が掛ってきて、昨晩は、いろいろなことを考えて一睡も出来なかったという。多分、黒岩さんは、私の睡眠中に電話の鳴ることを気づかって、正午になると同時にダイヤルを廻されたのだろう。黒岩さんには優しいところがある。

キミは、たしかにスプーンを磁石にしてしまったねと彼は言った。ハイと私は答えた。いままで、何か、特別な能力があると自覚したことがあるかと黒岩さんが言った。そんな

ことはないけれど、電気の通じやすい体質であって、会社やホテルの扉の把手でビリビリしびれることがある、他人の感じない電気を感ずることがあると答えた。

＊

しかし、私には、私は少しオカシイのではないかと思うことが何度かあった。

ごく最近のこと。

四月六日に私は名古屋にいた。プロ野球の開幕日である。新幹線のなかから満員の中日球場が見えた。三時ごろ、名古屋市の観光ホテルの最上階でアイスクリームを食べていた。中日球場はどのへんでしょうかと知人に訊いた。彼はあっちですと指さした。そのとき、私は、いま、木俣が3ランホームランを打って中日が広島に逆転しましたと言った。こういうときは無意識に言う。中日のファンである知人は、木俣は去年はどうして打てなかったんでしょうねと言った。私は、いや、今年は打ちますと言った。

その試合は、本当に木俣が3ランホームランを打って広島に逆転勝ちした。ただし、時刻でいえば、私が言ったときより後のことになる。

前に書いたように、私はそのことが好きではないし、自分自身では信じていないことなので、適中しても嬉しくなるようなことはない。

たとえば、テレビのクイズの番組で、一等はハワイ旅行にご招待というのがあったとする。まず目隠ししたお嬢さんが何十万枚かのハガキのなかから五枚を抜きとって、聴視者に示す。そのなかの一枚が当選者である。司会者がハガキを後手に持ち、上から何枚目かを言えとお嬢さんに言う。このとき、私には、当選者のハガキが見えてくる。まあ、だいたいは当る。

霊感の根拠というのはおかしいのだけれど、考え方の筋道は、はじめの五枚のハガキを見たとき、七十歳の女性というのがあったとして、こういう人がハワイへ行っても仕方がないと思い、そんなふうにして順に消してゆくのである。

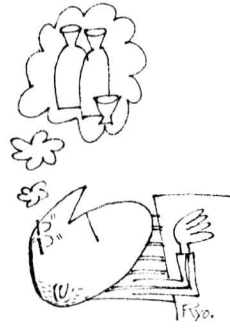
女房は、私には透視力があり霊感が働くと信じている。ただし、女房はそのことを嫌っている。私自身も嫌いだ。何かヤクザっぽいところがある。

十九歳、二十歳というときに、鉄火場へ出入りして負けたことがなかった。あのときは冴えていた。

鎌倉の海岸に、八色の球をころがして一等を当てるゲームがあった。景品は煙草だった。私は一人でその店を潰してしまった。こういうことを女房はひどく嫌う。私だって嬉しくないけれど、ゲーム台の前に立つと、右から何番目の球ということがわかってしまうのである。

ギャンブラーは、自分の超能力を信じ過ぎて身を滅ぼすのである。私がこれを嫌うのは、怖いからであり、人類の進歩に少しも裨益しないと思うからである。

身のほど知らず



この四月には酒を飲む日が続いた。二月も三月もそうだった。いや、一月も相当なものだった。去年の暮も、酒のことでは忙しかった。ふりかえってみると、まったく厭になってしまう。

しかし、この四月は、齢甲斐もなく深酒することが多かった。深酒をすると、その翌日は廃人同様になる。従って、一生を他人の半分しか生きていないという気分になる。私のような自由業者は、それがいいことか悪いことかわからないのだけれど、酒を飲んだ翌日は一日中寝たっきりで過すことができる。会社に勤めていた頃は、宿酔の朝、自分を励まして、満員電車に乗って出勤する。午前中は、ただもう、やたらに働く。溜まっていた雑件を（宿酔の頭でも処理できるような仕事を）どんどん片づける。それが最良の治療法だと信じていた。それが、自由業となると、寝ていようと思えば、寝たっきりでいられる。ただし、仕事は溜まってくるし、不義理が重なってくる。気持が重くなる。早く達観して、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.